『まるごと』学習者の「異文化体験の記録」の変化

テトリアナ　サウィトリ
ジャカルタ日本文化センター

本報告では、国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（以下、JF ジャカルタ）で実施している以下の３つのコースの受講者の「異文化体験の記録」の記述の変化について報告する。

全てのコースは、『まるごと　日本のことばと文化』（以下、『まるごと』）の「かつどう」編と「りかい」編を使用し、インドネシア人講師 2 人が課ごとに主担当と副担当に分かれて教えている。通常、授業には担当講師２人に加え、日本人講師（国際交流基金派遣専門家）１人がサポートで参加している。各コースは、前半、後半の２学期に分かれ、入門（A1）の後半の学期以降、継続しない受講者の人数によっては追加募集を行い、新たに受講者を受け入れている。

● 入門（A1）コース

実施期間	(1) 2012 年 12 月～2013 年３月　(2) 2013 年４月～６月
授業時間	90 分@１コマ、2 回×21 週＝42 回　合計 63 時間
学習者数	(1) 27 人　(2) 31 人
学習者の属性	(1) 性別：男性 10 人、女性 17 人 年齢：10 代 2 人、20 代 20 人、30 代 3 人、40 代２人 職業：高校生 2 人、大学生 3 人、会社員 17 人、その他 5 人 (2) 性別：男性 11 人、女性 20 人 年齢：10 代 1 人、20 代 24 人、30 代 3 人、40 代 1 人、50 代 1 人、60 代 1 人 職業：高校生 1 人、大学生 3 人、会社員 13 人、その他 4 人
使用教材	『まるごと』「入門（A1）」　(1) トピック 1～5　(2) トピック 6～9

● 初級１（A2）コース

実施期間	(1) 2013 年７月～11 月　(2) 2013 年 12 月～2014 年 3 月
授業時間	90 分@１コマ、2 回×30 週＋1 回＝61 回　合計 91.5 時間
学習者数	(1) 30 人　(2) 22 人
学習者の属性	(1) 性別：男性 8 人　女性 22 人 年齢： 20 代 24 人、30 代 2 人、40 代 1 人、50 代 2 人、60 代 1 人 職業：大学生 3 人、会社員 25 人、その他 3 人 (2) 性別：男性 6 人　女性 16 人 年齢：20 代 17 人、30 代 2 人、40 代 1 人、50 代 1 人、60 代 1 人 職業：大学生 2 人、会社員 17 人、その他 3 人
使用教材	『まるごと』「初級１（A2）」　(1) トピック 1～5　(2) トピック 6～9

● 初級２（A2）コース（レポート執筆時は前半のみ終了）

実施期間	2014 年 4 月～7 月
授業時間	90 分@１コマ、2 回×13 週=26 回　合計 39 時間
学習者数	19 人
学習者の属性	性別：男性 6 人　　女性 13 人 年齢： 20 代 14 人、30 代 2 人、40 代 1 人、50 代 1 人、60 代 1 人 職業：大学生 2 人、会社員 17 人
使用教材	『まるごと』「初級２（A2）」　トピック 1～5

１．はじめに

JF ジャカルタでは、従来、民間日本語学校との競合を避けるため、入門・初級レベルの日本語講座は開講してこなかった。しかし、2012 年 12 月から JF 日本語教育スタンダード（以下、JF スタンダード）準拠コースブック『まるごと』を試用するために入門・初級レベルの「日本語コース」の授業が始まった。コースでは、『まるごと』の「かつどう」編と「りかい」編を併用し、ポートフォリオも導入した。

ポートフォリオには、①「現在の私（プロフィール）」、②評価シート、③成果物、④「異文化体験の記録」を保存した。①「現在の私（プロフィール）」では、個人的なデータや今までの日本語学習歴、また日本語能力試験の受験歴などを記入してもらった。②評価シートは、受講者がその時の日本語能力を自己評価するページになっている。自己評価は、課ごとの終わりと学期の終わりのふり返りの際に行なう。③成果物は、学習の成果として作成したもので、名刺やポスターや作文などを集めた。④「異文化体験の記録」には、授業で勉強したりクラス外で日本人や日本語に触れたときに、分かったことや気づいたことを自由に記録してもらった。

『まるごと』は、海外の成人学習者を対象とした教材で、海外で交流する人々が日本語をツールとして、国や文化を超えて相互に理解し尊重し合うという相互理解の概念を重視してデザインされている（来嶋他 2012）。『まるごと』が準拠する JF スタンダードでは、相互理解の日本語のためには、課題遂行能力と異文化理解能力が必要だとしている。本報告は、『まるごと』で学ぶ受講者を対象として、学習が進むにつれて「異文化体験の記録」の記述がどのように変化するか、そしてその変化は異文化理解能力の向上を示しているかどうかを探ることを目的とする。異文化理解能力がつけば、『まるごと』の概念がよく伝わり、相互理解ための日本語教育も実現したと言えるだろう。

２．異文化理解能力とは

竹内（2009）は、英語で書かれた文献から異文化理解能力の定義を分析しているが、あいまいな点が多いと述べており、現在では、Byram（1997）のモデルが理論的コンセンサスを得ているとしている。このモデルは、異文化理解能力の構成要素を明らかにしており、CEFR の設定にも貢献している。また、このモデルの妥当性を検証した研究も複数見られるという。

JF スタンダードは、CEFR の考え方を参考にしており、『まるごと』は JF スタンダードに準拠している。『まるごと』の考え方を紹介した来嶋他（2014）でも Byram（1997）のモデルを使用して、どのような人

を「異文化を理解する能力を持つ人」とするかを示している。

Byram（1997）のモデルによると、異文化理解能力の構成要素は以下の3つからなる。

① 態度(attitude)：他者への関心や新しいことに好奇心を持ち、理解しようとする気持ち

② 知識(knowledge)：自分の文化や他者の文化についての知識だけではなく、インターアクションに関する知識もある。

③ 技能(skills)：自分の文化と他者の文化について未知の知識を見つけ出し、既知の知識と関連づけられること、つまり発見力と解釈力。

報告者が担当するJFジャカルタ日本語講座では、これらをもとに異文化理解能力を「受講者が自分自身の文化や今までに学んだほかの外国語の文化的知識などを利用して、積極的に授業や授業外で異文化（日本の文化を含め）に触れ、それぞれの文化を発見したり、解釈したりことができる能力」と考える。

３．実践

3.1　ポートフォリオの作成

新学期に入って最初の授業で受講者にポートフォリオの資料を配布して、オリエンテーションを行う。入門の受講者や初めてJF講座に参加する受講者に対して、配布する資料は、1.で述べた「現在の私（プロフィール)」をはじめ評価シートや学期のターゲットやスケジュールなどである。それから、スケジュールを見ながら、授業の流れを説明する。スケジュールの中にPFというマークがあるとき、自己評価をする。自己評価の目的は、勉強したCan-doが定着しているかどうかを自分自身で確認するためだと説明している。また、宿題があるとき、宿題を講師に提出して、返却された後でポートフォリオの「成果物」のところに保存する。それから、「異文化体験の記録」のシートには、授業で勉強した文化だけでなく、自分の文化を見て、比較した上で発見したことも書いてもらう。また、初級の後半から、勉強したやりとりや文型がより良く定着するようにトピックの終わりにスキット作成などのミニプロジェクトを行った。それから、異文化体験記録のシートで、それぞれのプロジェクトについて意見や感想を書いた。

学期の終わりには、成果物を見ながら復習することもできる。また、数年の時間が経って、自分が今まで何を勉強したか、何を作ったか、その成果物のファイルや「異文化体験の記録」を見て、自分の成長が見られるだろう。このような説明を受講者にした後、修了の条件として、テストの点数は60%以上、ポートフォリオはB以上（期限通りに提出したかどうか）であることを伝えた。ポートフォリオを採点対象としたのは、あまりやりたくない受講者でもポートフォリオで成果物を保存し、異文化体験の記録を保存するためである。

ポートフォリオの資料を配布するとき、各トピックの提出スケジュールは既に決まっている。受講者はそのスケジュールを持っておりので、きちんとしている受講者は予定通りに書いて、提出する。予定通りに提出しない受講者の中には、少し遅れて提出する人もいれば、期末試験が終わった後、まとめて提出する人もいた。

3.2　受講者が書いた「異文化体験の記録」の特徴と変化

本報告の作成に先立って、入門コースから継続して受講した7人の学習者を調査対象として「異文化

体験の記録」の分析を行った。本報告では、その中の２人の受講者（以下、S1 と S2）の記述内容を分析し、２人の記述の変化や異文化理解能力が高まったことが見られるかどうかを検討する。S1 は女性で社会人、S2 は男性で大学生。両者とも、「入門」から「初級 2」まで「異文化体験の記録」を継続して提出している。

２人の「異文化体験の記録」の特徴をコースごとに見ると、以下のようにまとめられる。（「例○-○」は添付の資料番号）

コース	S1	S2
入門 (A1) トピック 1～5	ほとんどが語彙のノート代わりとして使われた。新しく勉強した言葉や挨拶や勉強した表現が仮名で書かれていた。ページの片隅に日本文化や、特に、『まるごと』で学んだ場面に関わる言葉遣いを書いた。また、トピックに対する意見や感想、特にクラスの活動内容についても書いている。（例 1-1）	ポートフォリオを書いた経験がなく、「文化体験の記録」では、新しい言葉だけが書かれていた。語彙帳代わりに日本のことばを仮名か漢字で書いて、意味をインドネシア語で書いている。（例 2-1、2-2）
入門 (A1) トピック 6～9	『まるごと』に書かれていた文化だけでなく、アニメやドラマで見た日本の習慣や日本に旅行したときの経験や教師の説明で分かったことなどが書かれるようになった（例えば、動詞の豊富さ、イ形容詞とナ形容詞の違い、日本とインドネシアの習慣の違いなど）。ほとんどインドネシア語で書いていたが、日本語の例を挙げるときなど、日本語を使っていた。（例 1-2）	この学期になると、日本人の習慣や目に見えるものに対するコメントや新しい言葉・文型を書いた。全てのトピックではないが、何回か日本とインドネシアの相違点を書いた。S2 は日本に旅行したり、出張したりした経験が全くなかったが、日本人の店員の態度についての知識はアニメやドラマで得たようだ。全部インドネシア語で書かれている。（例 2-3、2-4）
初級 1 (A2) トピック 1～5	前半は「入門」と同じように、ポイントだけだが、少しずつ長い説明を書くようになった。たとえば、季節に関する知識や待ち合わせの習慣等などについて、日本人にとってはごく当たり前なことでも、インドネシア人にとって不思議だと思われることなどを書いた。授業では「いい天気ですか」は社交的な挨拶として紹介したが、その挨拶ではその日の気温や予報まで説明しなかった。S1 はドラマやアニメなどを見て、そうした知識を得たようだ。ほとんどインドネシア語で書かれている。（例 1-3）	この学期に少しずつ「異文化体験の記録」らしくなって、日本とインドネシアの相違点を書くようになった。書いたのは、「生活と文化」で勉強したことの説明ややり取り、勉強したときに分かってきた考え方などについてのノートやコメントなど。全部インドネシア語で書いたが、特別な地名やことばだけ仮名や漢字で書いている。（例 2-5、2-6）
初級 1 (A2) トピック 6～9	最初から最後までインドネシア語で書いているが、少しずつ書きかたが変わってきた。説明がある程度前より長くなり、単語の説明も表にして書くようになった。単語の説明というのは、ある日本語の単語がインドネシア語に訳す時、全く同じ意味の単語がない場合、インドネシア語で説明を書いたり、使い方の例をあげたりすること。 「初級 1」の後半になると異文化理解らしい内容が書かれるようになった。日本とインドネシアの文化的な共通点と相違点だけでなく、自分の習慣や生活体験の記録も書かれるようになった。（例 1-4、1-5）	最初から最後までほとんどインドネシア語で書いているが、日本語の単語も交えて書くようになった。今学期初めてひとトピックの終わりにプロジェクトをやらなければならない。トピックのプロジェクトをやった後の意見や感想を書いた。例えば、ピクニックの準備や出張者が来るときの準備など。全部インドネシア語で書いて、日本とインドネシアの共通点と相違点が書かれていた。必要に応じて、ポイントだけでなく説明も書かれていた。特別な地名や専門的なことばだけは仮名や漢字で書いた。（例 2-7）

初級２ (A2) トピック 1～4	最初は「初級 1」後半のときと同じようにインドネシア語である程度詳しく書いた。トピック２から日本語で書き始めた。日本語は、短い文が多く、ポイントだけが挙げられるようになった。(例 1-6)	最初から最後までインドネシア語で、日本とインドネシアの相違点だけでなく、共通点も書いている。また、単語の説明がある程度前より長くなった。単語の説明というのは、ある日本語の単語がインドネシア語に訳す時、全く同じ意味の単語がない場合、インドネシア語で説明を書いたり、使い方の例をあげたりすること。 (例２-８)

3.3 「異文化体験の記録」の分析

S1 と S2 の「異文化体験の記録」の記述をまとめると、書き方だけではなく、内容も少しずつ変化してきたことがわかる。最初の段階では、日本語や日本文化についての断片的なコメントやメモが多かった。『まるごと』を使用して、日本語だけでなく、日本社会の習慣や日本人の考え方も学んだ。日本文化を勉強する前は、ドラマやアニメで見た日本社会の習慣がよく理解できなかったが、勉強した後、わかるようになったことがうかがえる。そして自分の習慣や考え方をふり返るようになって、S1 と S2 のものの見方が変わり始めた。日本とインドネシアの相違点に目がいくことが多いが、意外なことに両国には共通点や類似点もあることに気付いてきた（S1 の場合、添付資料 1-4、1-5、1-6、S2 の場合は、添付資料 2-7, 2-8)。それは Byram のモデルに示されている比較、解釈する「技能」の１つの形だと考えられる。

S1 と S2 は、もともと「異文化体験の記録」シートにインドネシア語で自分のコメントや解釈を書いていたが、日本語の学習が進むについて、少しずつ詳しく書かれるようになった。学習とともに、観点も変わってきたし、見方も広まってきた。つまり、異文化理解が以前より広い範囲におよび、そして深くなってきたように思われる。しかし、「初級２」に入って、特に S１は日本語で多く書くようになってから、表現能力の限界のためか、文章や表現は短くなり、説明も簡単になってしまった。その時点で、異文化理解能力が変化したか、前より高まっているかどうか判断することは難しくなった。

S1 と S2 を比較すると、同じものを見ても異なる視点からコメントや感想を書いている。例えば、社会人の S1 は仕事で出張した経験や出張者の世話をした経験もあり、出張についての相違点と共通点を詳しく書いていた（例 1-4)。また、アニメよりドラマを多く見たり、日本へ旅行したこともあるので、日本の習慣などについて書くときは、『まるごと』で勉強していないことを書くこともあった（例 1-5)。一方、大学生である S2 は、アニメを多く見てきたので、現実の日本の習慣や社交的な付き合いなどについてはあまり知らなかったが、『まるごと』を使って日本語を勉強してから、いろいろな日本の習慣や文化がわかるようになった。例えば、タクシーには自動ドアがついている（例 2-2)、遅れたときはどのように謝るか（例 2-5)、出張で何をするか、出張者が来ると何をするか（例 2-4）などである。それぞれの背景によって異文化理解のプロセスが異なることも見えた。

４．今後の課題

これからも受講者がより多く、深く「異文化体験の記録」を書くように、講師も工夫する必要があると感じている。今まで自己評価の他に自由に記述できるものは、「異文化体験の記録」しかなかった。そのシートにトピックやトピックに関するプロジェクトについて、個人的な意見や感想などを書いてもら

った。結果としては個性的な書き方や見方が見られた。問題点は、記録の書き方や長さ・量などをまったく決めなかったので、2〜3行しか書かなかった受講者もいたことである。

「初級2」の後半になってから、新しいシートを作成した。新しい「異文化体験の記録」のシートには、書きやすくするため、「生活と文化」の写真や質問を使い、何を書くのかがわかりやすくした。自由度が高いポートフォリオに慣れてきた受講者は、今まで各トピックについて勉強したことと関係があるものなら何を書いてもよかったのに、新しいシートではそれができなくなったため、やや不満に感じるという声が聞こえた。その結果、記録内容に個性があまり見えなくなり、新しい試みは逆効果のように見えた。

同じフォーマットを新しい入門コースの受講者に配布してみたところ、受講者は「ポートフォリオは授業の内容のメモを書くためではなく、自分の意見や経験を書くためだ」と理解した。つまり、新しい単語の意味や授業のメモを書くのではなく、授業を受けて日本文化やインドネシア文化について、自分が新しく発見したことや気がついたこと（相違点や共通点、類似点）を書かなければならないということがわかった。

新しいフォーマットの「異文化体験の記録」は、ポートフォリオに慣れていない受講者をガイドするのによいと思う。慣れてきたら、より自由度の高いシートに書いてもらったほうがいろいろな観点からみたコメントやある程度深さのある発見が書けるようになるだろう。

受講者が自分が書きたいことを詳しく書けるように、記入するとき何語を使うのがいいか、その点についても考えなければならない。インドネシア語で書いたほうが、受講者の考え方がよくわかり、異文化理解能力を高めることができるのか。日本語で書きたい受講者に対して、できるだけ詳しくインドネシア語で書いてから日本語で書いてもらうようにすると、受講者の異文化理解能力の変化がより分かるようになるか。また、『まるごと』で学習することによって、異文化理解能力がつくかどうかはっきり知るためには、ポートフォリオだけではなく、インタビューなど他の方法を使ったデータ収集も必要だと思う。コースを担当する他の講師とともに、引き続き検討していきたい。

参考文献・サイト

来嶋洋美・柴原智代・八田直美（2012）「JF日本語教育スタンダード準拠コースブックの開発」『国際交流基金日本語教育紀要』第8号、103-117

―（2014）「『まるごと　日本のことばと文化』における海外の日本語教育のための試み」『国際交流基金日本語教育紀要』第10号、115-128

国際交流基金（2013、2014）『まるごと　日本のことばと文化』「入門（A1）」「初級1（A2）」「初級2（A2）」三修社

JF日本語教育スタンダード　http://jfstandard.jp/　2014年11月28日参照

竹内愛（2009）「「異文化理解能力」の定義に関する基礎研究」『共愛学園前橋国際大学論集』、105-112
http://www.kyoai.ac.jp/college/ronshuu/no-12/takeuchi.pdf
2014年11月28日参照

Byram, Michael. (1997) Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence. Multilingual Matters

Ltd.

Byram, Michael, Bella Gribkova, Hugh Starkey. (1997) Developing the Intercultural Dimension in Language Teaching – A Practical Introduction for Teachers.
http://lrc.cornell.edu/rs/roms/507sp/ExtraReadings/Section0/Section0/uploads/File1235272745204/InterculturalDimensionByram.pdf
2014年11月28日参照

資料

S1 の「異文化体験の記録」

例 1-1

30 Jan 2013

* Belajar menanyakan makan siang, apa yang dimakan, makan dimana, dan bagaimana makanannya.
* さん → ditambahkan setelah nama toko (dlm percakapan) supaya lebih sopan
  - Contoh : うどんやさん , おすしやさん
* 食べます = たべます
  飲みます : のみます
* すきな = Yg disuka
  きらいな : Yg tdk disuka (pernah coba tp tdk suka)
* Negatif form :
  - おいしい → おいしくない
  - たかい → たかくない
  - まずい → まずくない
  - やすい → やすくない
  - はやい → はやくない
  - おそい → おそくない
* ～は あります → tdk ada / tdk punya.

＜日本語訳＞

＊昼ごはんに何を食べるか、どこで食べるか、どんな食べ物かについて質問することを勉強した。

＊丁寧に言うために店の名前のうしろに「さん」をつけることがある。例：うどんやさん、おすしやさんなど。　（特にやり取りのとき）。

例 1-2

Perbedaan :

* Di Jepang pintu taksi bisa terbuka / tertutup sendiri dikendalikan oleh sopir.
* Taksi di Jepang menerima pembayaran dengan kartu kredit.

＜日本語訳＞

＊日本ではタクシーに自動ドアがついている。

＊日本のタクシーは、レジットカードで払うこともできる。

例 1-3

* di Jepang buah²an biasanya berbuah dan bisa dipanen di saat 秋
* di Jepang setiap musim ada makanan khasnya masing²
* di Indonesia musim panen berbeda² waktunya tergantung jenis tanamannya
* di Jepang menyapa org dengan cuaca itu biasa dilakukan.
* di Jepang ketika menyebutkan cuaca biasanya menyebutkan perkiraan suhunya juga

＜日本語訳＞
＊日本では、果物の収穫時期はほとんど秋。
＊日本では、季節ごとに特別な食べ物がある。
＊インドネシアでは、果物や植物の収穫時期はいろいろ。
＊日本では、挨拶するとき、天気について話すことが習慣になっている。
＊日本では、天気について話すとき、その日の気温の予報まで言う。

例 1-4

Persamaan	Perbedaan
* sama² ada istilah Bisnis Trip * kalau ada orang dari kantor pusat/ kantor cabang yg akan berkunjung, sama² di jemput dan diantar	* biasanya kalau tamunya lokal tidak sampai membantu check fasilitas hotel, hanya selatas mengantar sampai ke hotel saja * kalau tamunya orang asing biasanya lebih detail untuk memastikan semua baik² saja, termasuk fasilitas hotel, tapi biasanya pengecekan dilakukan sebelum tamunya datang, bukan setelah tamunya datang.

＜日本語訳＞	（右）相違点：
（左）共通点 ＊両方の言葉に出張という単語がある。 ＊本社から支社へ、また支社から本社へ出張者が来るとき、出張先の人が迎えに行ったり、見送ったりする。	＊出張者がインドネシア人の場合、ホテルの設備まではチェックない。ホテルまで送るだけ。 ＊出張者が外国人の場合、ホテル設備のチェックはするが、それは出張者がきてからチェックするのではなく、出張者が来る前にする。

例 1-5

PERSAMAAN	PERBEDAAN
* orang Jepang dan orang Indonesia sama² memperhatikan kesehatan, dan mencoba melakukan segala cara demi untuk menjaga kesehatan	* Meminum alkohol (sake) dlm jumlah tertentu dan rutin dilakukan termasuk salah satu cara u/ menjaga kesehatan. di Indonesia sebagian besar penduduknya tidak suka meminum alkohol karena minuman beralkohol dianggap sesuatu yg tidak baik untuk kesehatan.

＜日本語訳＞ （左）共通点 ＊日本人もインドネシア人も、健康を管理するためには、どんな方法でもする。	（右）相違点 ＊日本人にとって適量の酒を飲むことは健康にいいらしい。一方、インドネシア人にとっては、酒類を飲むのは、健康に良くないと思われているので、ほとんど飲まない。

例 1-6

1。日本には ホットオレンジ ジュースは ありません。インドネシアには あります。

2。日本人は 友だちと食事のとき 飲み物を かんぱいしてから、飲みます。
インドネシアには そんな ぶんかは あまり しません。

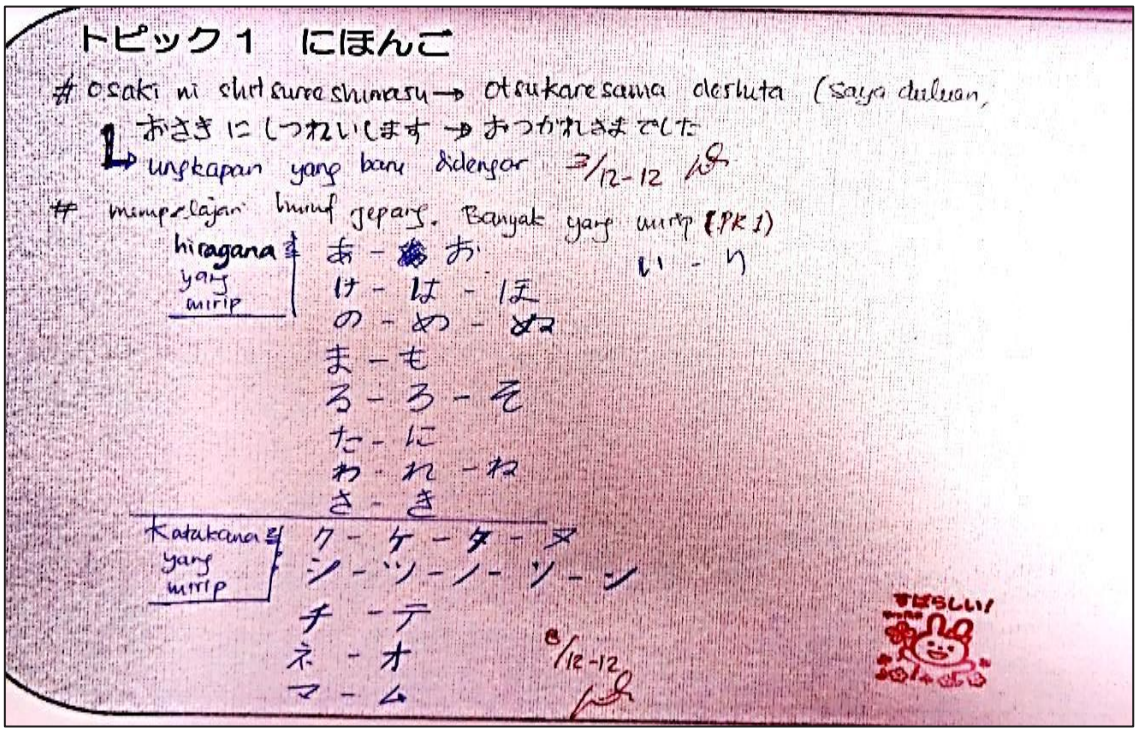
3。日本には 食事のとき おとを たてると、だいじょうぶです。
インドネシアには 食事のとき おとを たてては いけません。

4。日本人は お茶に さとうを 入れないで 飲みます。
インドネシア人は お茶に さとうを ときどき 入れて 飲みます。

5。日本人は ビールに こおりを 入れないで 飲みます。インドネシア人も おなじです。

S2 の「異文化体験の記録」

例 2-1

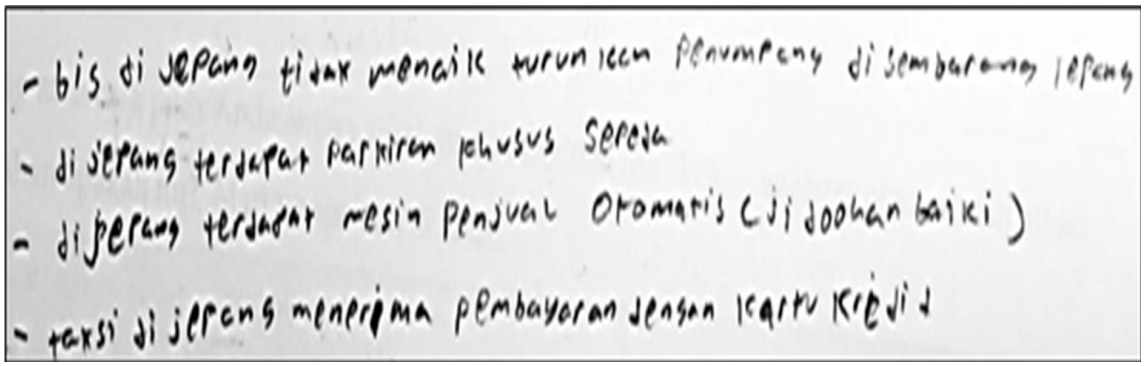


＜日本語訳＞

＊先に帰るときの挨拶「おさきにしつれいします」→返事は「おつかれさまでした」

＊（形が似ているひらがなとカタカナ）

例 2-2



＜日本語訳＞

＊日本のバスはどこでも止まって、乗客を乗せたり降ろしたりできない。

＊自転車用の駐車場もある。

＊自動販売機がある。

＊クレジットカードでタクシーの代金を払うこともできる。

例2-3

Perbedaan² : - Banyak lahan / gedung khusus parkiran mobil
- Waktu layanan ATM terbatas (tdk 24 jam)

＜日本語訳＞
相違点
＊（街中に）一般車用の駐車場がたくさんある。（駅前など）
＊ATMは営業時間がある（24時間使えない）。

例2-4

- cara menolak menggunakan ungkapan yg mirip dgn Indonesia
にほん = じ，いいですね
Indonesia = Baiklah kalau begitu / oke deh.
- Pedagang di Jepang menyambut pembeli dgn penuh semangat.
di Indonesia sangat jarang yang spt itu.

＜日本語訳＞
＊（面白いものをすすめられたとき、）日本語での断り表現はインドネシア語と似ている。
＊日本の店員は店に入ってきた人に、はきはきと挨拶するが、インドネシアではそのような店員はあまりいない。

例2-5

- Kalau orang jepang terlambat selalu memberikan alasan dan memberitahu berapa menit dia terlambat
- kalau orang indonesia cuman memberitahu kalau dia terlambat

＜日本語訳＞
＊日本人は遅刻するとき、どれぐらい遅れるか、前もって言う。
＊インドネシア人は「遅れます」と連絡するだけ。

例2-6

Memo/Catatan perbedaan dan persamaan kebiasaan, adat istiadat yang disadari yang telah dipelajari dari tema yang telah dipelajari

- di jepang memiliki beberapa tempat yang menjadi pusat berbelanja dengan barang² yg berbeda

c+h:

あきはばら → でんきてん

はらじゅく → かわいいみせ

- アメよこ → adalah salah satu pusat kairi lima di jepang yang bisa menemui beberapa barang khas dari negara lain di asia (China town & Tokyo)

- かんだ、ふるほんやがい → adalah salah satu pusat berbelanja buku, di mana terdapat banya toko buku yang menyediakan buku baru ataupun buku lama

＜日本語訳＞

＊日本では（例は東京）商品によって商店街が分けられている。

＊アメよこ　屋台みたいな商店街で、アジアからの商品を売っているところ。・かんだふるほんやがい　本屋の商店街として、新しい本や古本を売っている本屋が並んでいる町。

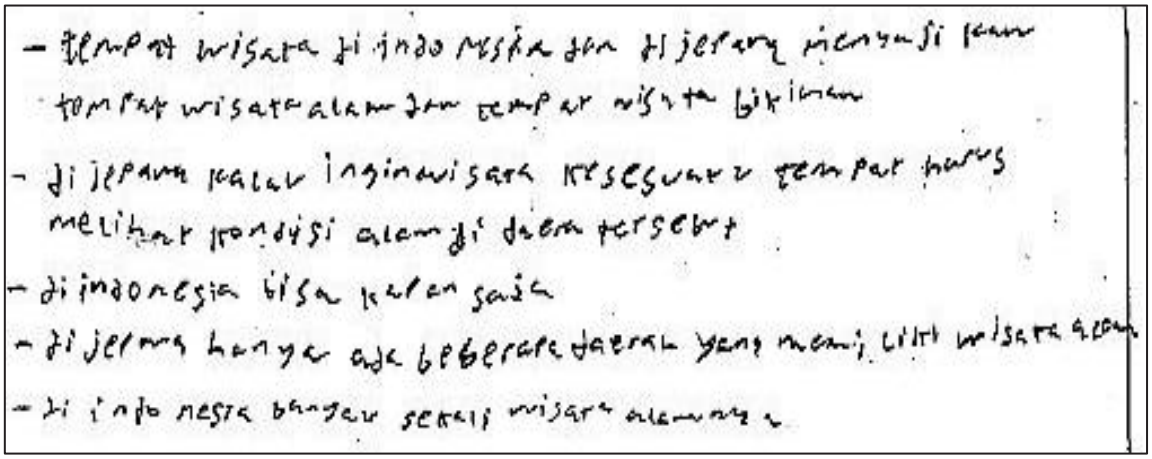
例2-7

karena saya belum pernah melakukan perjalan dinas keluar negri atau しゅっちょう, jadi saya belum paham bagai mana caranya menyambut tamu dari luar negri, tetapi dari simulasi yang saya lakukan, penyambutan tamu dari luar negri di negara jepang dan indonesia realit sama, cuman beberapa saja yang berbeda.

＜日本語訳＞

私は出張に行ったことはないので、外国から来た出張者を迎えることについては、あまり分からない。しかし、ミニスキットを通して、日本でもインドネシアでも外国から来た出張者を迎えるのはほとんど同じだと分かった。

例2-8


- tempat wisata di indonesia dan di jepang mempunyai jenis tempat wisata alam dan tempat wisata buatan
- di jepang kalau ingin wisata keseluruh tempat harus melihat kondisi alam di daerah tersebut
- di indonesia bisa kapan saja
- di jepang hanya ada beberapa daerah yang memiliki wisata alam
- di indonesia banyak sekali wisata alamnya

＜日本語訳＞

＊インドネシアと日本ではどちらも自然の観光地と人工の観光地がある。

＊日本では、どこかへ旅行に行くとき、必ずその地方の気候や季節を考えなければならない。

＊インドネシアではいつでも（旅行に）行ける。

＊日本には自然を楽しむ観光地があまり多くない。

＊インドネシアでは自然を楽しむ観光地がたくさんある。